

いしかりがわのこおりばし
石狩川の氷橋

石狩川河口にある石狩川渡船場は、船が鉄船となる昭和30年代まで冬期間の運航ができませんでした。使用されていた木造船では厚い氷で覆われた川を航行できなかったからです。渡船で渡れない冬期間は、本町地区と八幡町の間^{はちまんちやう}に氷橋をつくって通行していました。

氷橋の作り方は、雪を運んで氷の上に積み、その上にヤナギの枝を敷いてまた雪を乗せ、水をかけて凍らせてさらに雪を盛る。これを繰り返して厚い固まりの氷をつくって橋としました。幅は2～3mで氷の厚さは約1m、対岸まではおよそ240m（昭和48（1973）年）でした。目印として氷橋の両脇に紅白の棒を立て、視界のきかない吹雪の時に伝って歩けるようにロープを張っていました。氷が厚い時は二百貫^{がん}（750kg）の荷物を積んだ馬そりが通れたと云われています。昭和30年頃で、1日に1,500人くらいが利用したようです。

氷橋を利用した期間は年によって違いますが、おおむね12月末頃から2月末頃まででした。渡船場が石狩町直営であった昭和27（1952）年8月から昭和30（1955）年8月までは、氷橋の通行に渡船と同じ料金がかかりました。料金は昭和29（1954）年で、大人5円、子供3円、馬そり50円、手そり1円。料金を取ったのは、危険防止^{るもい}の為に氷の補強を行うのに人件費がかかったからです。昭和28（1953）年、札幌～留萌間が国道231号線となり、渡船場も昭和30年9月に国営となって通行料は無料となりました。

このように一時は国道でもあった氷橋ですが、鉄船「やはた丸」が就航して冬期も渡船が可能になった昭和34（1959）年にその役目を終えました。

また、「石狩川渡船場」とは別に、生振村から茨戸までの間を運航する「茨戸渡船場」でも、冬の期間は氷橋がつくられていました。

（石井滋朗）



- (1) 石狩町郷土研究会（1990）いしかり渡船場物語. 石狩町郷土研究会.
- (2) 札幌開発建設部・石狩町（1973）とせん. 札幌開発建設部・石狩町.
- (3) 鈴木トミエ編（1996）石狩百話. 石狩市.